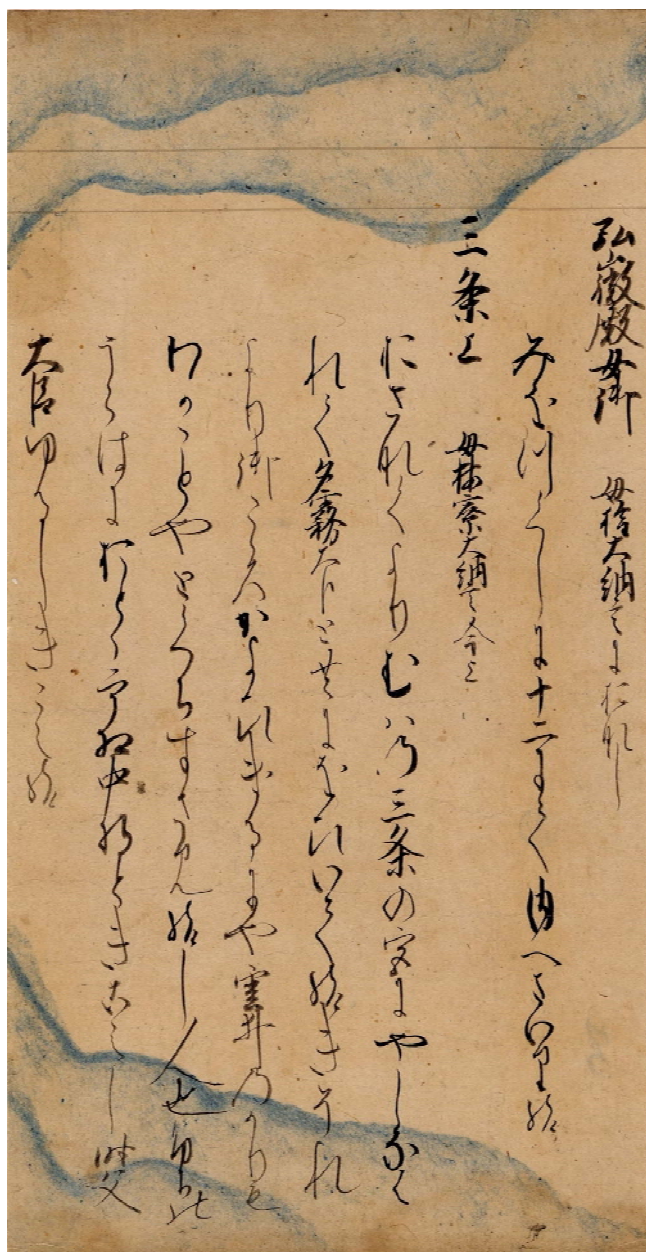


源氏物語の女君

—源氏物語研究所の集書を中心に—

期間 平成19年1月16日(火)～2月6日(火)



女君の物語

源氏物語は、勿論光源氏の物語です。しかし、400人もの登場人物のうち小野の老尼や樋洗童（ひすましわらわ）までを「女君」と呼ぶかどうかはともかくも、さまざまに個性的で魅力あふれる女性達が物語のおもしろさの大きなみなもとであることには、どなたも異論がないでしょう。紫式部にやや遅れ、重なる時代を生きた菅原孝標の女は「光の源氏の夕顔、宇治の大将の浮舟の女君」にあこがれ、鎌倉時代初期の批評家一藤原俊成の女とされています—も、数多くの女性を取り上げていました。現在、源氏物語に関して1年に500本以上の論が出され、少なくとも見かけは隆盛を極める研究量のめだたさの、その多くはやはり物語に登場する女性を対象として書かれます。もって光君以上の女君の重さ—体重ではありません—を知ることができるでしょう。今回の展示テーマを「源氏物語の女君」とした理由も、ここにあります。

さて本学図書館では、継続的に和・漢・洋の古典籍を集めてきました。日本の書物に限って言えば、和歌と物語がその主たる柱であり、評価の高さは申すまでもありません。とくに源氏物語研究所—準備段階から数えれば30年以上になります—の集書は、当然中心となる源氏物語およびその周辺資料、源氏物語に影響を与えまたは源氏物語の影響を受けた作品など、筋の通った良質のコレクションを形成しています。予算上の制約はあるにせよ、関係者の理解と努力、そしてものあつめに欠かせない「運」のたまものです。

ともあれ源氏物語は、高尚深刻な議論のまえにまず楽しく読まれるべき作品です。絵・系図・古注釈・本文それぞれの資料の中の女君と、是非楽しい語らいをなさして下さい。

佳例に従い、としのはじめの展示は源氏物語研究所がお引き受けしましたことを、一言申し添えておきます。

平成丁亥太簇中浣

源氏物語研究所長

源氏物語の女君

目録

* = 個人蔵

I 女君が登場する源氏絵

- 1 源氏物語絵 空蟬 江戸時代中期写 額装1面
- 2 源氏物語絵 浮舟 室町時代後期写 軸装1幅
(参考)源氏物語断簡 浮舟 伝橋本公夏筆 室町時代前期写 台紙貼1葉*
- 3 源氏物語絵巻 伝狩野探幽原図 天保2年(1831)幽遠斎写 卷子本3軸
(参考)絵入源氏物語 慶安3年(1650)山本春正刊 袋綴1冊
- 4 十帖源氏 江戸時代前期刊 袋綴10冊
- 5 源氏大和絵鑑 貞享2年(1685)刊 袋綴1冊

II 系図の中の女君

- 6 源氏物語系図断簡 伝冷泉為相筆 鎌倉時代後期写 台紙貼1葉*
- 7 源氏物語系図 室町時代末期写 折本1冊
- 8 源氏物語系図 江戸時代前期写 安養尼本 折本1冊
- 9 源氏物語系図 江戸時代前期写 折本1冊
(参考)源氏物語系図断簡 高雲軒明融筆 室町時代後期写 台紙貼1葉*

III 古注釈の女君

- 10 紫明抄 鎌倉時代後期写 列帖装1綴
- 11 河海抄 江戸時代初期写 袋綴19冊
- 12 源氏物語提要抜書 元禄15年(1702)行沙弥写 卷子本1軸
- 13 花鳥余情 江戸時代後期写 袋綴10冊
- 14 明星抄 江戸時代前期刊 袋綴5冊
- 15 源氏解 横本 江戸時代前期刊 袋綴1冊*

IV 女君が描かれた本文

- 16 源氏物語 夕顔 室町時代初期写 列帖装1冊
(参考)源氏小鏡 江戸時代前期写 小堀鞆音旧蔵 卷子本1軸*
- 17 源氏物語 賢木 奈良絵本 江戸時代前期写 列帖装1冊
- 18 源氏物語断簡 須磨 伝称筆者不明 鎌倉時代後期写 河内本 台紙貼1葉
- 19 源氏物語断簡 関屋 伝冷泉為相筆 鎌倉時代後期写 河内本 台紙貼1葉*
- 20 源氏物語断簡 総角 伝世尊寺行能筆 鎌倉時代後期写 別本 台紙貼1葉

源氏物語の女君

解題

* = 個人蔵

I 女君が登場する源氏絵

1 源氏物語絵 空蟬 江戸時代中期写 額装1面

形押し文様の金箔で上下に雲をあしらった極彩色大和絵(縦57.8、横47.3糎)。金箔散らしの霞は後補か。碁に興じる伊予介の後妻空蟬と継子軒端萩を、光源氏が透き見する有名な場面である。碁盤の左が軒端萩、右が空蟬、手前には桂姿の女房が控える。戸口に光源氏と空蟬の弟小君が立つ。

元来は屏風であったか。豪華絢爛の全体像がしのばれる。なお、絵の大半は純然たる大和絵であるけれども、画中のふすまや屏風の絵が狩野派風の唐絵になっているところ、お見逃しなく。

2 源氏物語絵 浮舟 室町時代後期写 軸装1幅

衣紋・面貌ともに細やかな描法を見せ、念入りな賦彩が美しい色紙形(縦26.1、横21.5糎)。表装の古裂も味わい深い。御簾の外には雪景色が広がり、中州の鷺のむこは宇治橋である。華麗な衣装の女性は、匂宮と薫大将の間で揺れ動く浮舟。事情を知らず久しぶりに訪れた薫が対座する。

当該場面を絵画化した他の作例は管見におよばないが、『源氏物語絵詞』(室町時代後期写、大阪女子大学)はこの部分の本文を抜き出す。また『源氏物語画帖』(土佐光吉作、京都国立博物館)総角と構図・描写が酷似し、注目される。仮名書家であり古筆研究家としても令名の高かった田中塊堂(1896～1976)旧蔵。

なお、『源氏物語』浮舟の本文は「寒き州崎に立てるかかさぎの姿も」に作り、登場するのは鶺鴒(カササギ)であるが、掲出の絵では明らかに鷺。これは絵師の勘違いではなく、伝本によっては「さぎ」の本文を持ち、古註釈にも「かささぎ」を鷺と解釈するものがあるので、それらのいずれかに従ったのであろう。

(参考)源氏物語断簡 浮舟 伝橋本公夏筆 室町時代前期写 台紙貼1葉*

藍内曇斐紙(縦23.9、横21.0糎)に14行30字程度書写、和歌2字下げ1行書。左より約5糎のところに折り目があり、毎半葉11行の列帖装四半本が原態か。装丁の特性により、右11行(源氏物語大成1916頁2行目～)と左3行(同1294頁14行～)とは連続しない。左側は、入水を決意した浮舟が辞世の歌と言うべき「かねのをとのたゆるひゞきにねをそへて我よつきぬと君につたへよ」(最終行)を詠むところである。

本文は青表紙本系。橋本公夏(1454～1538)の筆跡に類似するが、別筆。むしろ公夏よりやや早い頃の書写か。

3 源氏物語絵巻 伝狩野探幽原図 天保2年(1831)写 卷子本3軸

楮紙(縦28.6、横約38.0糎)を13(上巻)・20(中巻)・21(下巻)継

ぎ、1紙1図で合計54図。ただし橋姫の巻は2図あり、椎本の巻には相当する絵がない。上巻冒頭に幅約5糎の厚手楮紙を加え「源氏五十四帖 探幽」と墨書、この部分は汚れが目立つので、元表紙の一部または端裏書を貼り継いだのであろう。続いて遠幽齋識語「五十四帖／引歌／山路露／系図／爪印上／同 中／同 下／以上六十帖／探幽法印筆／天保二卯年十月中旬／幽遠齋写」。本文54帖に引歌以下6帖をあわせた60帖仕立ては、慶安3年（1650）蒔絵師山本春正（1610～1682）によって刊行された絵入源氏物語がまさしくそれ、両者の絵柄もおおむね一致する。慶安の絵入源氏物語は後続版本や奈良絵本の類に多大な影響を与えており、掲出本もまたその一例と見られる。したがって原図が狩野探幽（1602～1674）に由来するとは考えにくい。

しかし版本に依拠したとは言え、原図の大和絵風の柔らかい描写を狩野派得意のアタリの強い漢画の筆致にしたり、横長の画面にふさわしく風景面の趣を添えたり、屏風・几帳などのしつらいを変えたり、時には左右を反転させて新味を出すなど、様々な工夫が凝らされている。瀟洒な淡彩も美しい。継紙状態であったものを当館にて装丁、外題は貞政少登先生の揮毫。

展示箇所は、花散里の巻。几帳のかげに麗景殿女御の妹花散里、光源氏は鳴き渡るほととぎすに視線をむける。構図左右反転の一例。

(参考)絵入源氏物語 花散里

慶安3年(1650)山本春正跋 承応3年(1654)刊 袋綴1冊

藍色無地紙表紙（縦27.1、横18.3糎）中央に素紙題簽（縦17.4、横3.3糎）を押し「花ちるさと八／歌を名とせり」と刻す。本文料紙、楮。每半葉11行20字程度、和歌3字下げ2行書き、その末尾は改行せず地の文に続く。絵1面あり。

絵入源氏物語版本の濫觴、全体で226の絵を持つ。そのうち12図は見開きの大画面。刊行者山本春正は当代屈指の蒔絵師であり、松永貞徳門下の歌人・古典学者としても有名であった。

4 十帖源氏 江戸時代前期刊 袋綴10冊

紗綾形に蔓草押し模様の縹色紙表紙（縦27.5、横19.8糎）中央に素紙題簽（縦17.2、横3.5糎）を押し、「十帖源氏 一（～九）」と刻す。原装・原題簽の美本だが、最終冊の外題を欠く。人形屋を家業とする俳人野々口（雛屋）立圃（1595～1669）が物語本文を抄出、版下も挿絵131図も自作である。

巻1冒頭に石山寺伝説（大斎院選子内親王の求めにより紫式部は石山寺に参籠、琵琶湖に映る月を見て須磨の巻を着想）を載せ、巻10末尾には六条院・二条院の図、系図を付す。掲出本に刊記はないが、「万治四年卯月吉辰／荒木利兵衛板行」と刻する伝本あって、出版の下限を万治4年（1661）すなわち寛文元年としうる。成立はさらにさかのぼって承応3年（1654）立圃60歳の折と見るのが妥当（渡辺守邦説）であろう。

展示箇所は、惟光女の五節舞姫の華麗な姿を、夕霧がかいま見る場面。見開き右側3行目に、恋心を訴えた夕霧の歌「あめにますとよわかひめのみや人も／わがこゝろぞすしめをわするな」が刻される。「とよわかひめ」は諸本「とよをかひめ」に作り、珍しい異文となっている（孟津抄に言及あり）。

5 源氏大和絵鑑 貞享2年(1685)刊 袋綴1冊

薄墨色地に型押し文様の紙表紙（縦22.5、横10.5糎）は後補。早く表紙と本文4丁分（紅梅・竹河1丁、東屋以下巻末3丁）を失ったらしい。宿木まで24丁存。4周単辺（縦16.6、横11.8糎）、版心「源氏（丁付）」。他の資料をつきあわせると、貞享2年うろこかたや開板、江戸浮世絵の開祖菱川師宣（?～1694）の絵と判明。序文に「源氏物語の絵とて画師のかけるを見れ共分明に見わけがたければ・・・御製の短歌を頭書にして源氏絵鑑と名付」と著作の目的を明らかにする。円窓形の中に各巻1図を収め、上方は所謂源氏文字鎖「げんじのすぐれてやさしきは」を配する。

展示では見開き左側（薄雲の巻）をご覧いただきたい。簀子に出ようとする父光源氏を追う後ろ姿は、明石の姫君。髪が肩のあたりまでしか伸びていない。「御指貫のすそにかかりて慕ひきこえ給ふ」ところである。

II 系図の中の女君

6 源氏物語系図断簡 伝冷泉為相筆 鎌倉時代後期写 台紙貼1葉*

藍内曇斐紙（縦27.1、横14.2糎）に淡墨界2条を施し、物語の登場人物を系譜化する。江戸時代の古筆伝書に見えないが、田中塊堂（2 源氏物語絵 浮舟 参照）編『昭和古筆名葉集』の「源氏系図雲紙高九寸三分」に相当。美しい料紙を用いた卷子本に映える後京極流の影響色濃い筆跡は、鎌倉時代書風の一典型である。

源氏物語系図は、三条西実隆（1455～1537）が整えたものと、実隆以前の古系図に2分され、掲出の切は勿論古系図に属し、5枚ほどのツレが見つまっている。古系図中、人物配列の点で伝為氏筆本と大略一致、しかし細部の異同もかなりある。なお伝称筆者を藤原為家（1198～1275）とする断簡もあるが、書写年代からは為相（1263～1328）に近い。

三条上とは頭中将の女雲居雁のことで、実隆本系図では「夕霧大臣室 雲居の雁とくちずさみし人」の如く、簡略な説明のみだが、掲出の断簡は「おさなくよりむばの三条の宮にやしなは／れて夕霧大臣と共にをひいで給きそれ／より御こゝろかよひけるにや雲井のかりも／わがごとやとくちずさみ給し人也ふちの／うらばにおとゞ宰相中将ときこえし時父／大臣ゆるしきこえ給」と詳しい。「三条上」の由来も明らかである。

7 源氏物語系図 室町時代末期写 折本1冊

市松模様を織り出した金銀欄表紙（縦31.8、横14.7糎）の大型折本。布目斐紙に金箔散らしの見返しは後補か。外題・内題なし。本文料紙、斐紙。横に白界4条を施し、これらを基準に墨の系図線を引く。まま縦の白界も見られる。「先帝」より始まり「前和泉守」まで23系198名を掲げ、「そのすぢともしらぬ人々」「無名」と続く。系図の後に「きぬの色を人さまによりてさだめたる事」「人々のかたちを花によそへたる事」「居処事」を付し、「源氏物語のおこり」で終わる形式。古系図の特徴がよく出ている。

展示個所は、蛍兵部卿の孫としてに巢守三位が掲げられる部分。「母同／すもりの巻に二品宮に／まいりて御琵琶の師にて／その賞に三位し給にほふ／宮かよひ給しをはなやか／なる御ふるまひふさはし／からず思て朱雀院の四宮（以下略）」と、現行の源氏物語に

はない筋が語られる。久保木秀夫『『源氏物語』 巢守巻関連資料再考』（『平安文学の新研究』）参照。

8 源氏物語系図 江戸時代前期写 安養尼本 折本1冊

無地の丹表紙（縦17.7、横11.5糎）を付し、薄く雲母を引いた斐紙使用。24折に系図を3段書きする。安養尼本古系図は現在数本が知られるのみ、掲出本は24系187名を載せ、末尾を写し落としているけれども、常磐井和子「安養尼本源氏物語古系図」（『古代文学論叢』3）の紹介するところとよく一致する。

展示では、光源氏の後半生に翳りをもたらすことになる女三宮の記述、「御はゝせんていげん／じのみや めんとり／わきてかなしう／したてまつり給／わかなに六でうめん／にわたりたまふ・・・かしはぎ／のまきにあまに／なりたまふ」を示す。

9 源氏物語系図 江戸時代前期写 折本1冊

白茶地に鳳凰・瑞雲を織り出した金襴表紙（縦10.1、横12.5糎）中央に金紙題簽を押し「光源氏系図」と墨書。金銀泥にて幾何文様を塗り分ける見返しは、表紙と共に後補か。内題「光源氏物語系図」。系図線を引かず全39折両面書写、ただし裏面は14折まで。「太上天皇」より始まり「系図外之人」で終わる形式、奥書はないが実隆本系永正9年本の類と思われる。

見開き左側四行目以下頭中将のむすめについて「玉鬘尚侍母夕顔／四のとし夕がほの上のめのとに／具してつくしへくだり年へ／て玉かつらの巻に京へのぼる／蘭に尚侍まき柱にひげくろ／の北方になり給」と記すところを展示。

（参考）源氏物語系図断簡 高雲軒明融筆 室町時代後期写 台紙貼1葉*

斐楮混漉き料紙（縦横17.5糎）の升形本断簡。神田道伴（1710～1772）の極札「高雲軒明融冷泉為和卿息／一宮〔正恒〕」通り、明融（？～1582）の筆跡と見られる。ツレの幅広い調査によって結論の変更もあり得るが、現在のところ実隆本系文亀4年本を写したものと考えられ、実隆本の早い流布をうかがわせる資料である。書写内容は桐壺帝と冷泉帝の女宮たちを並べて掲げるところ。

Ⅲ古注釈の女君

10 紫明抄 鎌倉時代後期写 列帖装1綴

表紙を欠いた列帖装1括り分のみ存。斐楮混漉きの料紙（縦25.5、横17.4糎）毎半葉10行22時程度書写、32項目8丁の残簡であり、10冊仕立て第1冊目後半の一部が残ったものと推される。本文を抄出、合点をかけ、注は2字下げとする。河内本校訂者源親行（？～1277～？）弟素寂の撰、永仁2年（1294）の成立であるから、鎌倉時代後期写の掲出本は、わずかの分量とは言え貴重な本文資料。

展示した見開き右側最終行（10行目）に「すずめのこをいぬきがにがしつる」と見えるのは、10歳ほどの若紫の君のおしゃべり。左側の「犬公いぬきなり紫上の童の名也」へと続く。

11 河海抄 江戸時代初期写 巻1欠 袋綴19冊

巻1序・料簡・桐壺の注を欠き、19冊存。藍色無地紙表紙（縦26.5、横20.7糎）左肩に蠟箋の外題（縦15.3、横2.7糎）を押し「河海抄二篇木 うつ蟬 夕顔」と墨書、巻5の筆者の手であろう。毎半葉13行30字程度書写。各冊第1丁に「矢野蔵書」の朱印。最終丁に「月明荘」の朱印あるも『弘文荘待賈古書目』には搭載されていないようである。全体は6手ほどの寄り合い書き。巻18にのみ朱の書き入れ。巻6は表紙・外題とも他の冊とは異なるので、取り合わせか。ただし書写年はさほどの差はない。奥書なし。書名は「河海ハ細流ヲ厭ハズ、故ニヨクソノ深キヲナス」の金言によるのであろう。文献を渉猟し諸説を集めて、現在も有益さを減じない古註釈である。伝本は大きく中書本系と覆勘本系に分かたれ、掲出本は中書本に属する。

今回は巻3末摘花を展示した。見開き左側2行目以下「ふけんぼさつの御のり物と 普賢菩薩乗大白象鼻如紅蓮華色觀普賢經」「いろは雪はづかしくさを 少青きはめて白すこしあをくみゆる也」「まほにはれたり 晴たりとは額たかき心也或説腫云々」は、赤鼻色白でひたいが広い常陸宮の姫君の特異な容貌に付注したもの。

12 源氏物語提要抜書 元禄15年(1702)行沙弥写 卷子本1軸

海松色地に梅花文様を染め出した絹表紙（縦15.3、横13.6糎）、外題なく紫の平紐を付す。本文は楮紙を用い、その紙背に雲母を引く。冒頭に源氏物語提要第二十若菜上よりの抜書、ついで西行・壬生忠岑・藤原敦忠らの古歌を写し、「元禄十五壬午師走於浅草／官舎書焉畢／行沙弥〔花押〕」の書写奥書。源氏物語提要はあまり流布しなかった注釈書で、その抄出例もまた珍しい。

前坊と六条御息所のわすれがたみ秋好中宮が、女三宮降嫁にあたり「さしながらむかしを今に／つたふれば玉のを櫛ぞ／神さびにけり」の歌を添えて櫛を送る。「中宮はさひはゐありし／人なれば女三もあやかり／給へと祝ひ給ふ」と続くが、その後の女三宮の悲劇を考えると、皮肉な説明ではある。

13 花鳥余情 江戸時代後期写 袋綴10冊

縹色布目紙表紙（縦24.4、横18.4糎）中央に4周単辺（縦17.5、横2.9糎）を刷った題簽、その中に「花鳥余情 一（～十）」と墨書。毎半葉11行27字程度、30巻を10冊に書写。第10冊末に「愚応仁之乱初」以下文明4年奥書・「此抄十五冊拭老眼」以下文明8年奥書・「這抄一条禅閣所作也」以下文明12年奥書を持つ。諸本は初稿本・再稿本・献上本と3分類され、掲出本は再稿本に属する。

見開き右側5行目「かゞやく日の宮ときこゆ 一条院の御時上東門院の御入内有／て藤壺に（以下略）」は、先帝四の宮が桐壺帝の女御として後宮に入り、「輝く日の宮」と讃えられた記述に、上東門院藤原彰子入内の史実を指摘したものである。

14 明星抄 江戸時代前期刊 袋綴5冊

香色地に紗綾形文様を空押しした紙表紙（縦28.0、横18.8糎）は相当古いものだが、後補か。27巻分を5冊に綴じる。掲出本は最終冊を欠くので出版時期を明らかにしがたいが、料紙・刷りともに良好。明暦3年（1657）の刊記を持つ本と、無刊記の

本とが知られ、無刊記本が先行する可能性もある。

展示個所は、巻39夕霧。見開き左3行目「こ君の御事 柏木なり」、6行目「おほと
のなど 致仕おとゞ也」、7行目「院よりも 朱雀院なり」の注は、障子ばかりをへだて
としてかろうじて夕霧の接近を拒んだ落葉宮が、亡き夫柏木・舅致仕大臣・父朱雀院のこ
とを思い、さまざまに思い乱れる場面に対応。

15 源氏解 横本 江戸時代前期刊 袋綴1冊*

縹色布目紙表紙（縦13.8、横18.6糎）の中央に「源氏之内すくれたる事」と墨
書。わずか5丁の小冊だが伝本極稀、保存もよい。簡略な注の後に慶安4年（1651）
の年紀が見え、刊行もまたこの年に近いと思われる。

見開き右側（第1丁ウラ）3行目「一をんな あふひのうへ」、七行目「一みめ 秋こ
のむの中宮^{ちうぐう}」、一〇行目「一こゝろ あかしのうへ」とあって、女君への評価がおもしろ
い。

IV女君が描かれた本文

16 源氏物語 夕顔 室町時代初期写 列帖装1冊

素朴な風合いの厚手楮紙を用いた本文共紙表紙（縦27.1、横21.0糎）の中央に
「ゆふかほ」と打ち付け書き。室町時代には比較的珍しい大振りの列帖装である。当館は
他にツレとして紅葉賀・賢木の2帖を所蔵し、いずれも青表紙本系本文を持つが、夕顔の
巻は一部別本と共通する異文あり。附属文書によれば、下冷泉持為（1401～1454）
の筆跡と考えられていたことになる。江戸時代中頃には夕顔・紅葉賀がひとまとまりで保
管され、賢木は別経路で伝えられた。3帖が当館で出会ったのは平成15年のことである。

見開き左側5行目以下「かうとてかいさくり給にいきもせずひきうごかし給へ／どなよ
なよとして我にもあらぬさまなればいといたく／わかびたる人にて物にけどられぬるなめ
りと」は、なにがしの院で絶え入った夕顔を、源氏が揺り動かすところ。

(参考)源氏小鏡 江戸時代前期写 小堀鞆音旧蔵 卷子本1軸*

墨流し斐紙（縦34.4、横約63糎）を6枚継いだ大型卷子本、巻頭に「鞆音蔵」の
朱印あって栃木県出身の日本画家小堀鞆音（コボリトモト、1864～1931）の旧蔵
と知れる。墨流し装飾は超絶技巧とも言うべき複雑精妙なもので、おおらかな書風によく
映える。残念ながら夕顔・若紫・末摘花のみ、いずれの巻の分も不完全である。本文はお
おむね古本系だけれども、展示個所の「うばそくの行なふ道をしるべにてこむよもふかき
ちぎりわするな」（夕顔の巻、源氏詠）は、第5句「ちぎりわするな」が諸本では「ちぎ
りたがふな」となっており、掲出本の独自異文であるところ、注目してよい。

17 源氏物語 賢木 奈良絵本 江戸時代前期写 列帖装1冊

金泥にて霞・土坡・秋草等を描き、金切箔・野毛を蒔いた紺表紙（縦24.0、横17.
7糎）左肩に朱地金泥下絵題簽を押し、本文と同筆で「賢木 十」と墨書。表紙は各巻の
内容に従って変化をつけている・見返し、金布目紙。内題なし。良質の斐紙に毎半葉10
行17字程度書写、墨付64丁。和歌改行3字下げ3行書き、2行目はさらに1字下げる。

絵の前ではしばしば散らし書きとして、余白が生ずるのを避けている。

絵8面あり、天地に縹色霞引きを施した極彩色の所謂奈良絵本で、その図柄は慶安3年山本春正跋絵入本（3(参考)絵入源氏物語 花散里参照）に一致し、本文もまた同様。したがって慶安版本を種本とする作例と認められる。

見開き右側に本文、その後半部を散らし書きとするのは余白を作らない配慮であること、先に述べた通り。左側の絵は、御簾のもとの六条御息所と榊の枝を差し出す光源氏。黒木の鳥居も描かれ、舞台が野宮であることを示す。

18 源氏物語断簡 須磨 伝称筆者不明 鎌倉時代後期写 河内本 台紙貼1葉

斐紙（縦15.6、横15.1糎）に10行11字程度書写、極札なく、伝称筆者不明。おおむね河内本の特徴を示すが、独自異文もあって、河内本中の異本。河内本によく見られる朱の句読点はない。

須磨下向に際し、光源氏と紫上が別れを惜しむところ。6行目「かゝる世を／みはべるよりほかのおもはずなる事／はなに事か思給へられん」が、紫上の言葉である。

19 源氏物語断簡 関屋 伝冷泉為相筆 鎌倉時代後期写 河内本 台紙貼1葉*

斐楮混漉き料紙（縦23.9、横15.3糎）に8行18字程度書写。原態は列帖装四半本、丁のオモテ面か。「冷泉為相卿あふさかの〔琴山〕」（表）・「切庚子 九〔了音〕」（裏）は古筆了音の極札、享保5年（1720）庚子の鑑定。「為相卿あふさかの〔汲水〕」（裏面記入なし）は大倉汲水の極札である。

逢坂の関で石山へ詣でる光源氏一行と、常陸より上京する空蟬たちが出会う関屋の巻。12年を経ての再会である。料紙右端の空蟬の歌「あふさかのせきやいかなるせきなれば／しげきなげきのなかをわけゝん」から、巻の名がつけられた。この歌の第5句「わけゝん」を青表紙本系諸本では「わくらん」とし、掲出断簡が河内本系であることを示す箇所。これ以外も河内本の本文によく一致する。朱の句読点もまた、河内本の特徴のひとつ。

20 源氏物語断簡 総角 伝世尊寺行能筆 鎌倉時代後期写 別本 台紙貼1葉

斐楮混漉き料紙（縦16.6、横16.5糎）に10行11字程度書写、原態は列帖装六半本。平安時代の気分を伝える優しい書風ゆえか広く愛玩されたらしく、総角・手習2帖の断簡が10枚以上残る。『新撰古筆名葉集』世尊寺行能の項に「六半 源氏」、『古筆切目安』に「六半切 新極ナレドモ出来上」と見え、鎌倉時代初期の著名な書家世尊寺行能（1179～？）に擬せられる。しかし行能よりは少し下ったころの書写であろう。掲出の断簡だけで本文系統を云々するのはむつかしいが、ツレを総合してみれば別本。

2行目「こ宮のゆ／めにみえたまひつる」以下は、宇治八宮の次女中君が、昼寝の夢に亡くなった父宮を見たときと語るところ、相手の姉大君は「うせたまひにしのち／いかでゆめにだに見たて／まつらむと思を」と答えている。

（担当 高田）

